

兵藤 裕己編著『シリーズ思想の身体 声の巻』

春秋社，2007 年 3 月刊，vii+258 頁，2,100 円(税込)

千葉 俊一

本書は 2006 年から 2007 年にかけて春秋社から刊行された『シリーズ思想の身体』（編集委員 島藺進・黒住真・鎌田東二）全 9 巻の最終巻である。このシリーズは学知のジャンルを横断して日本の思想・精神文化をその身体性に注目してとらえ直すことを目的としている。この場合の「身体」とは文字通り人間のからだを指すとともに、広く人間生活の「かたち」を意味し、さらには「基層」「下層」「深層」をも示す（本書「はじめに」参照）。そのようなシリーズの一冊である本書は「声」の身体を問う論考集である。編者・兵藤裕己を中心とする 8 人の論者の議論によって、極めて示唆に富んだ書に仕上がっている。本書の構成は次のようである：

はじめに

第一章 声と知の往還 兵藤裕己

第二章 自然と声 鈴木英夫

第三章 日清戦争と近代日本の軍楽隊 樋口覚

第四章 儀礼の声 阿部泰郎

第五章 芸能の声 沖本幸子

第六章 〈電話する女〉の声 坪井秀人

鼎論 声の可能性 川田順造・鎌田東二・兵藤裕己

あとがき

評者の見るところ、本書の中心は編者・兵藤裕己の論考「声と知の往還」（第一章）であり、最後の鼎論「声の可能性」は川田順造と鎌田東二をいわば共鳴板にして、第一章での兵藤の議論を補足しながら再確認させるものといえる。したがって、本書評はこの兵藤の論考の紹介と論評を中心に行うことにしたい。それでは、日本文学研究者である兵藤裕己（1950-）の論考「声と知の往還—音声中心主義は形而上学か？」の内容を確認しよう。

兵藤は斉藤孝の『声に出して読みたい日本語』（草思社 2001 年）が日本語の身体性に注目している点が斬新でヒットしたことの指摘から議論を始めている。そして国語教育現場での古典教材の「群読」に触れ、こうした音読によって原初的感動を体感させる『平家物語』の文章作法を問う。『平家』では、語り手（書き手）が聞き手（読み手）と共有する言葉と知——それはその

社会を支える〈法〉であり規範である——の世界に自身を同調させるかたちで文章が構成されている。こうした『平家』の文章は個としての作者による何かの表現ではなく、語り手（作者）は、その語る（書く）行為を通して常に日常的・個的な主体からある公共的な主体へと転移する。伝承された物語を語る主体は、ある公共的で超越的な主体だと兵藤は言う。

しかしこのような文章作法は近代によって崩壊してゆく。19世紀末の資本主義経済の展開は近代以前の社会的・共同体的関係性を急速に過去のものとし、これと平行して言文一致体文学が形成されてゆく。そこでは近代以前の公共的・超越的な言葉と知の主体に代わって、意識主体としての「自分」が認識と表象の場となっている。そしてこれが現代の我々の思考の枠組みになっており、この枠組みによって我々は古典の文章にも接している。『平家』原文の音読によって現前化するのは、『平家』の歴史を伝承してきた超越的な主体である。音声言語が意識主体としての〈自己〉を現前させるというのは、ヨーロッパ近代のロマン主義的思い込みにすぎず、これに対するジャック・デリダの音声中心主義批判は、声＝意識（ロゴス）という等式を自明の前提とする以上、西洋形而上学の伝統から出ていない。

『平家』を朗読する声を作り出す試みは、近代日本語の文章とは異なる発話の主体を作り出す試みである。しかし注意しなければならないのは、「群読」という集団的朗読法によって現前化する超越的な主体を即ネーション（国民・民族）としての「われわれ」日本人としてしまうことが、もう1つの近代主義だということである。声が呼び起こす集合的な記憶の主体を、アメリカ流グローバリズムに対抗する文化的ファンダメンタリズムの拠点のようにイメージしてしまうならば、それは近代という枠組みの中で幻想されるもう1つの〈近代的なもの〉（モダニティ）ではない。兵藤はそう述べてこの論考をしめくくっている。

「鼎論 声の可能性」では、本書の編者である兵藤が、アフリカ文化の研究で著名な人類学者・川田順造（1934-）と宗教学者でありユニークな神道人である鎌田東二（1951-）を相手に声について意見を交し合う。

まず兵藤が本書第一章で述べたデリダの音声中心主義批判への批判を再提示する。デリダによって代表されるポストモダンの思想とは結局、近代的な原理によって近代を乗り越えようとする試みでしかなかったのではないか。声や身体（という本来的に非合理的領域）の問題を近代（ないしはポスト近代）的な偏向を排しつつ、しかも可能な限り論理的に見定めることが必要だ。そのことによって、脱モダンの「声」の可能性が見えてくるであろうと兵藤は論じている。

兵藤のこのいわば問題提起に続いて、彼の司会で川田・鎌田・兵藤が自分たちの研究・体験に基づいて、音と踊りの身体知（感覚知）、近代西欧の閉鎖系思考システム、創造ではなく彼方からの呼びかけを聞き取る芸術表現、などの話題を語っていき、近代的自我を超えた主体と関係するところに声の可能性があるのでないかという指摘でこの鼎論は終わっている。

以上、兵藤の論考と「鼎論」の内容を確認したところで論評をしたい。兵藤裕己は第一論文集『語り物序説—「平家」語りの発生と表現』（有精堂 1985 年）以来、主に平家物語を素材にして〈語り〉とそれを中心とした問題系を研究し続けている。この兵藤の研究ベクトルは2方向にわたる。1つは〈語り〉とそのパフォーマンスとしての芸能への研究ベクトル、もう1つは

それと連動して〈声と語り〉あるいは〈歴史と物語〉という回路を通して構築される社会システム（近代の場合は「国民」の創出）への研究ベクトルである。前者は第二論文集『平家物語の歴史と芸能』（吉川弘文館 2000 年）に、後者は『太平記〈よみ〉の可能性—歴史という物語』（講談社 1995 年）から『「声」の国民国家・日本』（日本放送出版協会 2000 年）を経て『演じられた近代——〈国民〉の身体とパフォーマンス』（岩波書店 2005 年）に一応のまとまりを見せている。

こうした兵藤の研究の流れから見ると、本書の論考「声と知の往還」の位置づけは少々わかりづらい。『平家物語』の文章作法を論じてはいるが、前者のベクトルに沿うものではなく、声・語り（もの）を通しての社会システム（社会編成）を脱構築的に読み解くという後者のベクトルそのままでもない。本論考では兵藤は後者を引き継ぎながら、さらに一歩進んだ「脱モダンの文章・言葉・声」という議論を展開しているといえよう。たしかに本論考において兵藤は、前著『演じられた近代』の「終章」の中で見せている、実は同一枠内にある近代と反近代（ポストモダン）、近代的に主体化された身体に代わる別の身体の創造、という視角を引き継いでいる。しかし前著で行った、特に演劇に焦点を当てた声の身体に関する議論をそのまま繰り返してはいない。したがって『シリーズ思想の身体 声の巻』という枠組みが暗に期待するものと、兵藤が提示した議論との間には微妙なズレがあるのかもしれない。

本論考で兵藤が展開する議論において注目すべきテーマは「個を超越する主体への同調」であると評者は見る。兵藤にとってはそれが「脱モダンの文章・言葉・声」を創出するのであり、上述した「近代的に主体化された身体に代わる別の身体の創造」につながることで理解される。そしてこのことは「鼎論」でも確認される。これまでの兵藤の研究にはその姿を見せなかった（と評者には思われる）テーマであり、またすぐれて宗教的なテーマであるがゆえに、評者としてはこれを少し考えてみたい。

「個人を超える何か」（本書 16 ページ）「公共的で超越的なことばと知の世界」（同 17 ページ）「ある公共的で超越的な主体」（同 25 ページ）「日常の「自分」を超えた超越的な主体」（同 34 ページ）などの表現によって兵藤が想定ないしはイメージしているものは一体何なのだろうか。それと同一・同調・共振することで、脱モダンの声（言葉・文章・身体）の可能性が出てくると兵藤は言うのだ。そしてこのような「主体」は、「社会を律している法とも、神仏あるいは「運命」（『平家物語』）とも言い換えられ」（本書 34 ページ）と兵藤は言う。この観念が兵藤自身の『平家』の深読から生まれたものであろうことは想像に難くないが、なかなかわかりづらい。兵藤自身が論考中で「主体」の正体を明かしていない（あるいは明かせないでいる）ので、我々としては推測してみるしかない。兵藤のレトリックから単純に連想できるのは、仏教における法あるいは一神教的存在としての阿弥陀如来ないしは大日如来、ユダヤ——キリスト教——イスラームにおける唯一神、諸新宗教における一神教的でもあり多神教的でもある神々、中国思想における天などである。脱モダンを目指す兵藤のスタンスから考えると、「超越的な主体」が近代（主義）的信仰によって崇敬される神仏であるとは思えない。また兵藤のこれまでの言説の全体から推測するに、多元社会を是とする立場のようであるから、特定の宗教集団の礼拝対象を「超越的な主体」と同定しているとは考えにくい。とすれば、兵藤の想定ないしはイメージに近いのは、法^{ダルマ}あるいは天となろう。この2つの概念の内実を見てみよう（以下、『岩波哲学思想事典』による）。

〈ダルマ〉はインド思想の最も重要な概念の1つであり、漢訳仏典では「法」または「道」と訳されている。原義は「保つもの」である。宇宙・世界を保つことから「最高の實在」「真理」「真実」などの意、社会を保つことから「慣習」「風習」「規範」「きまり」「義務」「律法」などの意、人倫を保つことから「徳」「善」「善い行為」などの意、宗教的世界を保つことから「宗教」「宗教的義務・行為」などの意、事物を保つことから事物の「性質」「属性」「特相」「様態」などの意、さらに事物そのものの意としても使われる。ダルマは仏教思想史においても重要な概念であり、原始仏教經典でのダルマは、法則・正当・基準、真実・最高の實在、教説、経験的事物の意をもつ。

一方、〈天〉は中国思想において中心的な位置を占めるものである。周時代に宇宙の主宰者としての天（上帝）の觀念が生まれ、さらに有徳者＝統治者という政治的道義的性格付けも行われ、この天が王権・皇帝権の根拠とされていく。こうした統治論的な天の思想は春秋期にかけて、人々の命運、道徳・正義の指標、自然界の規律性などの意を含むものとなっていき、前漢期にはこれらを統合した天人相關理論が生まれる。下って北宋では天を理と規定し、さらに性をも理と規定し、天の自然法則性（理）と人の道徳性（理＝性）とを統一した「天人の理」の思想が生まれた。これによれば天理は自然法則であり同時に道徳律である。この思想は朱熹の理気論に継承される。また「天下」という語に注目すると、天が民を生じたとする生民觀により民は国家（朝廷）の民ではなく、天（天下）の民であるという觀念と、天の本質が公平・均・調和であることから天の公という觀念とが中国史を通して形成され、地理・政治概念である天下が天下公の觀念をもつことにより、万民性・道徳性を有するに至った。（中国仏教と道教における天の觀念もあるがここでは触れない）。

このように〈ダルマ〉と〈天〉の内実を確認してみても、兵藤が「公共的で超越的な主体」という表現で想定ないしはイメージしているものが少し見えてきただろうか。それは人間個々人と社会、さらには世界・宇宙を律し保持するものであり、正義・公平を示す善なるものという価値觀が付与されているように思われる。漠然としながらも、こうした内容が兵藤の想定・イメージに含有されている可能性はある。また、「公共的で超越的な主体」とおそらく同意義で「匿名的で集合的な主体」（本書 36 ページ等）という表現も兵藤は繰り返し使っている。兵藤が集団による「群読」に注目しており、集団性や共同性といったものに関心があるとすれば、この「匿名的で集合的な主体」や「公共的で超越的な主体」を、たとえば「共通善を目指す社会共同体」という概念（近代主義的臭みがあるが）に置き換える準備も兵藤の思念の内にあるのかもしれない。ただその場合、概念のベースとなるのは、西洋ならばギリシャ哲学思想とキリスト教思想であるのに対し、東洋そして日本ならば仏教思想や上述したダルマや天の思想であろう。

しかし、今後の日本社会・文化において兵藤のいう「公共的で超越的な主体」がいかなる形をもつものとして知覚・体感されえるのか、それを想像するのは難しい。「そのような自分を越えるなにものかに同調する感受性が、現代の私たちには失われているのだ。」と兵藤は言っている（本書 34 ページ）。兵藤は閉鎖された近代的自我（の身体・言葉・文章）を突破する回路として、「公共的で超越的な主体」なるものを提示しているのだが、評者としてはこの思念には飛躍があるように思える。閉鎖的で孤立した近代的自我（主体）を突破するための回路として、まず他者との関係性が意識されるべきではないだろうか。他者との関係性の中で自我（主体）がとらえ直

されることを通して、近代を乗り越える可能性が生まれてくるのではなかろうか。このことを飛び越えて、いきなり「公共的で超越的な主体」をもってくるのはいささか唐突に感じる。まずは「他者に同調する感受性」の回復から始めればよいのではなかろうか。もちろん兵藤自身、『平家』から読み取った「主体」が一体何であるのか、どのようにすれば人々がそれを知覚・体感できるのかを模索している途上にあるのだろう。日本文学・文化史研究を通してこの思念をさらに練り上げ言語化していくことが、兵藤の今後の課題となろう。しかしこの「主体」は、兵藤自身が本論考「声と知の往還」で念を押しているように、近代が生み出したナショナルなもの（国家・国民）と同定されてはならないのである。

もう1つ評者が本論考を読んで疑問に残ったことがある。仮に兵藤の言う脱モダンの声（身体・言葉・文章）が実現されたとして、それは近代以前の声、それこそ『平家物語』の文章作法に現われているようなものとどのような差異をもつのか。脱モダンは少なくとも表層的には近代以前の回帰ということになるのか、という疑問である。この問題を論ずる力はいささか評者にはない。「超越的な主体」という観念とともにこの点も今後の兵藤の研究において明らかにされることを期待している。

さて、兵藤裕己以外の論者の論考についても見てみよう。沖本幸子と坪井秀人のものに評者は特に注目したので、この2つを別扱いにして簡単な内容の紹介と論評を行ってみたい。

本書第二章「自然と声」では、言語情報科学の研究者である鈴木英夫（1949-）が、近代によってもたらされた閉塞状況から人間が抜け出す回路としての声の共感的交わりを論じている。この論考は脱モダンの声を目指すという点で兵藤裕己の議論にリンクしうるものであるのだが、鈴木が着目する「自然」ないしは「普遍」というものの意味に関する議論をもう少し展開してくれると一層わかりやすくなったと評者は思う。第三章「日清戦争と近代日本の軍楽隊」では、文芸評論家の樋口覚（1948-）が近代日本にとって軍楽隊が西洋音楽の窓口であったと述べている。テーマとしては兵藤の『演じられた近代』に接続する重要なものであるのだが、論旨をもう少し明確にし、同じテーマで論ずるにしてもたとえば兵藤が扱わなかった領域を取り上げていたりするとより深みのある論考になったと思われる。第四章「儀礼の声」では、中世宗教文化を研究する阿部泰郎（1953-）が、仏教儀礼における声明から念仏への流れを追っている。これは音曲から見た日本中世仏教小史とも言える論考で、宗教研究の立場からは大いに参考になる。ただ阿部には何かしらの問題提起をしてほしかったという思いが評者にはある。

本書第五章が、今様などの中世芸能を研究する沖本幸子（1974-）による「芸能の声—遊女をめぐる」である。この論考で沖本は平安時代の声の諸相を考察している。一般的に貴族女性は歌わないという習慣の中で、歌う行為がともすれば下品で野卑になる一方、極めてエロティックな行為になることを沖本は『源氏物語』等を引用して指摘し、そうした危険性があるがゆえに宮廷女性は歌わないという不文律が成立していた可能性を示唆する。そうした宮廷社会に「歌う女性」（歌のプロ）として出入りしていたのが遊女であり、彼女たちの歌声がどのように受容されたのかを「すみのぼる」という『更級日記』等に現われる表現に注目しながら沖本は考察している。「すみのぼる」歌声は天地感応の声であったと想定されるが、『梁塵秘抄口伝集』に見られるようにすばらしい声に神が感応するという思想が平安末期には存在していた。遊女の美声が神

仏と交流する手段となりえていた（『古事談』等）一方で、異界に通じる美声は死を招くもの（『今昔物語』等）でもあった。最後に沖本は遊女という存在がいくつかの声のタブーを超越するものであった可能性を述べている。宮廷社会では女性は歌わないというエロスに関係したタブー、山のような境界ではみだりに歌ってはいけないという死と関係したタブー、こうした禁忌を超越する危険で境界的な肉体に深く根ざしたものが遊女の声であった。

この沖本の論考は、いわばエロスの身体である遊女、その遊女の声に内在する宗教性を指摘している点が大変興味深い。宮廷社会という中世の支配者によって線引きされた世界のうちと外を行き来し、歌声によっていわばこの世とあの世を行き来する遊女という境界的存在そのものが極めて宗教的である。エロスと宗教との関係性は、これまで宗教研究においても様々な議論がなされてきたが、沖本が提示した「声」に注目した議論は斬新に思える。評者が特に関心を持ったのは、沖本が引用している書写山性空上人のエピソード（『古事談』等に収録されている）である。「生身の普賢菩薩を拝みたいと願っていた性空は、夢のお告げに従って遊女の長者を訪ねていく。長者の家は折しも遊宴乱舞の最中。長者は乱拍子の歌を歌い始める。（略）奇異の思いをなした上人が眼を閉じれば、白象に乗った普賢菩薩が「微妙の音声」で（略）法を説き、目を開ければまた、遊女が乱拍子の歌を歌っているという。」（本書 153-154 ページ）。宗教（神仏）とは何かが、逆説的に示唆されているかのようなエピソードである。しかもその宗教（神仏）は女性の身体と声によって姿を見せている。声の身体を中世の遊女（芸能者）において考察した沖本のこの論考は、もしかすると本書『シリーズ思想の身体 声の巻』の「期待」にもっとも応えている論考かもしれない。

第六章は日本近代文学・近代文化史を身体・声に焦点を当てて研究している坪井秀人（1959-）による「〈電話する女〉の声」である。坪井の研究領域は兵藤裕己のそれとかなりだぶっているといえよう。ただその視角は異なるようである。この論考前半で坪井はジャン・コクトーの戯曲『人間の声』（1930年初演）を中心に考察する。当時の脆弱な電話状況（電話交換を介した接続、頻繁な混線や断線）を背景に、舞台に唯1人登場する「電話する女」の声の情念が電話というメディアによって身体化されていることを坪井は指摘する。観客（聴衆）は1人の女が話し、あるいは話そうとするのをまなざす位置に置かれる。舞台に向き合う観客はいわば1人の女の声を見ることを体験する。これによって彼女の声そのものが主役の位置に押し上げられている。

ところでかつての脆弱な電話通信の主体とは、この戯曲の中でも示唆されているように、実は電話交換手に他ならない。坪井の論考後半はここに焦点を当てている。欧米同様日本でもごく初期を除いて、電話交換手は女性、それも未婚女性の職種として固定化され完全に女性ジェンダー化されてきた。交換嬢と呼ばれた日本の女性交換手は、ヴィクトリア朝的規範（男性への「愛」と「癒し」）を押し付けられたアメリカの女性交換手同様、男性中心社会に極めて都合のよい役割（「従順」「周到」「根気」「鋭敏」）を要求された。「職業婦人」である女性交換手たちは、世間の誤解や不興を買いながらそれこそ一個の機械のごとく非人間化されて業務に携わることが暗に求められていた。そればかりでなく、電話交換の応答遅延のための顧客（通話者）の忍耐、その苦情処理のための交換手の忍耐、このような緊張関係を背景に声をつなげるチェック・ポイントである交換局において緊張をゆるめ、あるいはゆるがすエロスの感性への男性顧客の欲望も見られたのである。

最後に坪井は、電話というメディアが（交換が自動化される以前は）外部を遮断した透明な媒体ではなく、交換手の存在も含めて極めて不透明で不安定なものであったこと、それゆえに〈電話する女〉たちの物語が物語として成立しえたこと、そしてそのような電話のロマン主義とジェンダー化は携帯電話とインターネットが時間と空間を支配する現在においてはほとんど成立しがたいものとなっていると述べ論考をしめくくっている。

坪井のこの論考は議論の焦点が絞りきれない弱さがあるものの、電話というメディアによる声の身体を議論している点でうまくいっているといえよう。電話交換手が完全に女性ジェンダー化されていたことを指摘し、我々に「声のジェンダー性」とでも呼ぶべきものへの注意を向けさせている。電話交換手の存在は過去のものとなったが、現在、企業の営業・販売の現場における電話「オペレーター」なる役割はまず女性が担っている。デパート・劇場・映画館での館内放送はまず大体女声である。選挙運動の宣伝カーからの連呼も大概女声である（昔はウグイス嬢と呼ばれた）。なぜ女声なのか、という問いによって今なお続く社会における情報伝達ロールの女性ジェンダー化を脱構築する議論が今後坪井によってなされてもよいだろう。また、坪井が女性交換手に対する男性の関心として述べている女声のエロスということもこの問題と連動しているかもしれない。これは前述した沖本の議論とも関係するだろう。今後の坪井の議論の展開に期待したい。

以上、兵藤裕己の論考を中心に本書『シリーズ思想の身体 声の巻』の紹介と論評を行った。「二十一世紀初頭の今日にあって〈声〉が提起する問題は、以上の論文や鼎論によって過不足なく言及されたとおもう。」という兵藤の言葉（本書 258 ページ）通り、本書は声の身体に関する様々な議論の呼び水となっていよう。『シリーズ思想の身体』の一冊にふさわしい論集である。